

第2回札幌市まちづくり戦略ビジョン審議会専門部会 (環境、都市空間分野) 会議録

日時：令和4年4月28日（木）18時開会

場所：札幌市本庁舎 12階1号・2号・3号会議室（札幌市中央区北1条西2丁目）

出席：岡本委員、椎野委員*、高野部会長、牧野委員、村木委員*、山中委員（*…オンライン出席）

事務局：浅村政策企画部長、中本企画課長*、田中企画係長、岩間企画担当係長、滝口企画担当係長、熊谷企画担当係長、紺野企画担当係長
（*…オンライン出席）

1. 開 会

○事務局（浅村政策企画部長） 札幌市まちづくり戦略ビジョン審議会の専門部会を始めさせていただきます。

私は、事務局を務めております札幌市まちづくり政策局政策企画部長の浅村でございます。

委員の皆様には、昨年4月から戦略ビジョンのビジョン編のご審議をいただき、2月にその答申をまとめていただきました。これまでのご意見やご助言、会議運営へのご協力に改めてお礼を申し上げます。

ビジョン編は、市から議会に3月に報告をいたしまして、現在、市民からご意見を募るパブリックコメントの準備を進めているところでございます。

今回から戦略編の検討が本格化をいたしますので、引き続き、専門的な見地からのご意見を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

それでは、引き続き、事務局の中本企画課長からご説明をいたします。中本は、本日、別の場所からオンライン参加となっておりますので、よろしくお願い致します。

○事務局（中本企画課長） 事務局を務めます札幌市まちづくり政策局企画課の中本でございます。この4月から着任しておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

本来であれば臨場してご挨拶を申し上げたかったのですが、諸事情によりオンライン参加となりますことをお許しく下さい。

本日の専門部会ですが、オンラインの方も含めて6名全員の委員の方にご参加をいただいております。連休前の夜の遅い時間に大変恐縮ですが、ご協力をありがとうございます。

私も含めてですが、オンラインでご参加をいただいている方は、発言の際だけミュートを解除していただきますよう、ご協力をお願いいたします。発言をされる際は、挙手をいただければと思います。

それでは、この後の議事進行は部会長にお願いしたいと存じます。

高野部会長、どうぞよろしくお願いいたします。

2. 議 事

○高野部会長 部会長を務めております高野でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

まず、資料2-1の戦略編の策定に向けてという資料に九つの分野横断的に取り組む施策があります。色としては4色に塗り分けられておりますが、これが分野横断的に取り組む施策ということで、今日はこれに対する意見を出していただくこととなります。

次に、今日の進め方についてです。四つに色分けされている九つのテーマのうち、スマートについては四つの項目となっておりますが、これを二つに分けて、合計五つについてそれぞれ資料説明をいただいた後、それに関連する意見を出していただくことといたします。

今回の狙いとしましては、分野横断的に取り組む施策について、それぞれの部会から、分野に関わりなく、いろんな意見をどんどん出してほしいということですので、より多くの意見を忌憚なく出していただければと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、はじめに資料1と資料2についてご説明を頂戴します。

○事務局（中本企画課長） それでは、資料2までをご説明させていただきます。

まず、資料1をご覧ください。

こちらは、既に答申をおまとめいただいたビジョン編の概略を1枚に整理したものですので、本日の議論の中でビジョン編に振り返る必要が生じたときには、適宜、ご参照いただければと思います。

続きまして、資料2-1をご覧ください。

こちらは、今、高野部会長からもご説明がありましたが、本日よりご議論をいただく戦略編の概略案をまとめたものでございます。

上から、第1章、第2章、第3章と掲載しているように、全部で大きく3章の構成に分けて作成していきたいという考えでございます。

第2章をご覧いただきたいのですが、こちらには、まちづくりの基本目標ごとの施策として、ビジョン編で設定していただきました基本目標ごとの施策を掲載する予定です。基本目標ごとに並べた施策で住民のニーズや地域の課題が全て満たせるのであれば、この章に全ての行政施策が並んで完結するのですが、ご承知のとおり、それだけでは複雑な課題を満たすことはできないため、分野を横断して、行政で言うと、縦割りを廃して横串の下に取り組んでいくことが大変重要になってくると考えてございます。

第1章ではそれを特出して整理したいと考えておりますので、本日は、まさにこの第1章についてご議論をいただければと思います。資料の真ん中の辺りに本日ご意見をいただきたい事項とありますが、第1章でお示したテーマに基づいて取り組むべき施策やその施策を推進するに当たっての効果的な手法などについてご意見をいただけると幸いに存じます。

また、部会長からもありましたように、分野横断的な取組となりますので、本日は全ての項目についてご意見を頂戴したいと考えてございます。専門部会は三つありますが、いずれの専門部会でも第1章については全体のご議論をいただくというやり方で進めているところです。

第2章の基本目標ごとの施策については、6月の開催を予定しております次の専門部会において、環境、都市空間分野に特化してご議論をいただき、第3章の行財政運営の方向性については、9月の開催を予定しております全体の審議会でご議論をいただきたいと考えています。

本日、第1章の内容については、資料の右側にあるように、ビジョン編でご議論をいただきました重点課題であるユニバーサル、ウェルネス、スマートという概念に加え、人口減少対策という重要課題を意識しながら整理してございます。

この戦略編は、行政が取り組むことを主に掲載するものですので、限られた資源の中でできることとできないことが当然出てきますし、行政が実際に取り組む個別の事業がこの戦略編の下にアクションプランとして設定されることとなります。ただ、その辺の整理については我々行政でしっかりと議論をしてまいりますので、まずは、皆様のそれぞれのお立場から忌憚のないご意見をいただいて、この戦略編を少しでもよいものにしていきたいと思っております。ご協力を何とぞよろしくお願いいたします。

次に、資料2-2をご覧ください。

こちらは、参考までに今後の検討スケジュールを改めて整理し直したものですので、適宜、ご参照いただければ幸いに存じます。

資料2までの説明は以上でございます。

○高野部会長 先ほど説明したとおり、本日は、資料3から資料7について一つ一つ説明し、議論をするということですが、まず、資料2-1の第1章、第2章、第3章、今後の進め方を含めて、何かご質問やご意見があったらお聞きしたいと思います。いかがでしょうか。

(「なし」と発言する者あり)

○高野部会長 それでは、資料3について説明をいただいた後、議論に入らせていただきます。資料3の説明をお願いいたします。

○事務局(中本企画課長) それでは、資料3をご覧ください。

ユニバーサルというテーマで整理をした項目についてご説明させていただきます。

まず、現状については、これまでご議論をいただいたことを改めて整理しております。

札幌市では、2040年代には高齢者人口が全体の約4割となる見込みであり、また、外国人受入れの拡大により、市内で暮らす外国人の増加も見込まれるため、誰もが互いにその個性や能力を認め合い、多様性が強みとなる社会の実現が求められます。

それから、上から四つ目のダイヤのところですが、そのためには、移動環境や建物等の

バリアフリー化や心のバリアフリーなどを進め、日常生活をはじめとして様々な場面における障壁や困難を解消し、誰もが他者とつながり、交流できる環境を整えていくことが必要だということを掲載しております。

次に、施策の方向性の欄をご覧いただきたいのですが、ここでは、この現状を踏まえ、「ユニバーサル社会の実現に向けたハード・ソフト両面のバリアフリーの推進」を掲げております。

ここで資料1を振り返っていただければと思います。ビジョン編においてユニバーサルのご議論をいただいた際には、「誰もが互いにその個性や能力を認め合い、多様性が強みとなる社会の実現」というテーマを設定していただきました。その幅広いユニバーサルという概念の中から本日ご議論いただきたいものをこの施策の方向性に掲げておまして、大きく分けて、移動経路のバリアフリー、建築物のバリアフリー、心のバリアフリーという三つのテーマに整理をさせていただいております。

次に、主な施策をご覧ください。

①は、移動経路のバリアフリーについてです。

①-1の移動等円滑化の推進では、地下鉄駅のエレベーターの複数化、ノンステップバス、ユニバーサルデザインタクシーの導入促進に向けた取組の検討、さらに、都市公園の主要なトイレのバリアフリー化などを掲げております。

①-2のバリアフリー情報の充実という項目では、地下ネットワークにおける案内サインの充実や民間のアプリケーションなどを活用したバリアフリー情報のさらなる充実の検討を掲げたところです。

①-3の冬季の乗り継ぎ機能の強化では、下水熱などの再生可能エネルギーを活用したヒーティングの検討を掲げました。

次に、資料の右側に移りまして、②は建築物のバリアフリーについてです。

②-1の市有建築物では、近年、新築や増改築をしたもの以外の既存の建築物のさらなるバリアフリー化を検討していくことや、国の方針を受けて、学校の段差解消やバリアフリートイレの設置を重点的に進めていきたいということを掲げております。

②-2の民間建築物では、バリアフリー化がなかなか進んでいない500平米未満の小規模建築物、あるいは、既存の建築物のバリアフリー化に向けた促進策を検討すること、宿泊施設における客室のバリアフリー改修や従業員研修、施設コンサルティング等への支援策を検討することを掲げたところです。

次に、③は心のバリアフリーについてです。

③-1の学校教育における取組では、子どもたちへの心のバリアフリーの指導や、教員等の心のバリアフリーの理解促進、それから、授業において障がいのある子とない子が共に学ぶことができるように配慮することなどを掲げました。

③-2の企業等における取組では、心のバリアフリー教育の促進などを掲げております。

③-3の地域や市民に向けた取組では、市民に心のバリアフリーを広めるための取組の

推進や、障がい者スポーツや障がい者向けの音楽ワークショップの開催など、スポーツ、文化による心のバリアフリーの推進を掲げたところです。

最後に、③-4の当事者への取組では、制度や相談体制等の構築と情報やコミュニケーションへの支援として、資料に掲載している項目を掲げさせていただきました。

ユニバーサルの説明は以上でございます。

○高野部会長 資料3についてはユニバーサルという見出しになっています。ハード・ソフト両面のバリアフリーということで、移動経路のバリアフリー、建築物のバリアフリー、心のバリアフリーという三つに分けて、それぞれ施策が書かれておりますが、まだまだ不十分な部門も多々あるかと思っておりますので、どの点からでもご質問やご意見を頂戴したいと思います。

○山中委員 私は、国際化、国籍のところについて一つ意見を言いたいと思います。

札幌市の大通高校では、渡日帰国生徒の入試をやっています。これはすばらしいものであり、北海道では唯一、全国的に見ても非常に珍しいものです。高校に入ろうとすると、日本語が分からないと難しく、入試というのは日本語の微妙に表現が大きく点数に影響するので、ネイティブではない人にとってはとても大変で、なかなか合格できない問題があり、大通高校ではそれに上手く対応しています。

さらに、北海道大学の近くの保育園でも、日本語が分からない両親が来ても何とか通訳をしながら入れていたり、ハラルの食べ物以外は食べられないから、給食を提供するのは別に弁当を持ってきてもらったりしております。この箇所では、バリアフリーについて述べられていますが、札幌市として本当に国際化する上で対応がちゃんと取れているのかということが気になります。

これは、子ども教育だけではなくて、都市空間ということでも同様です。ここではハードウェアをイメージしているように見えますけれども、世界を引きつける魅力と活気ある街になると、例えば、市立高校の取組、あるいは、小学校中学校でどのように言葉の問題を解決するかを考えてほしいと思います。

最近、夜間中学校をつくるなど、非常にいい試みをやっていますが、学校教育の中に国籍への対応や日本語が母語ではない人の視点も入れたらいいと思います。

○高野部会長 大変重要なご指摘だと思います。

今はコロナ禍なので分かりませんが、リゾート地の中の倶知安の分校は、日本語が全然分からない小学生も短期でどんどん受け入れているらしく、児童たちはコミュニケーションを結構うまく取っていて、学校教育が回っているという話も聞くのですよね。

○山中委員 例えば、北九条小学校にも新しい児童が来ていたときに「どこから来たの？」

「インドネシア」なんていう感じで子どもたちは上手にコミュニケーションをとっていますよね。ただ、日本語が得意でない親御さんに学校の制度を説明するというのは普通の日本人でも難しいところがあるので、難しいことがあります。札幌市にもそういうところをうまく超えられるような制度が必要で、そうでないと、個々の教員や学校の対応になるの

で、ぜひとも考えてもらいたいということです。

○高野部会長 ほかにいかがですか。

○岡本委員 すごく大切なお話だなと思って伺っていました。

僕は、条例や法律を守ってつくればいいのでしょうみたいな形がすごく優しくないなどよく思っています。優しさの意識は広がってきているとは思いますが、結局、健常の方と障がいのある方では移動経路が違って、遠くのエレベーターに乗らなければいけないというのはすごく寂しい気持ちになってしまいます。札幌市には、書いているものを守ればいいでしょうではなくて、何が大事なのかという本質的なところを捉えてきちんとつくってほしいと思いますし、そこを書いてほしい、明確にしてほしいと思っています。

実際に困っている人の声を聞きながら検討しますとも特に書いていなくて、条例や法律を守りますとしか読めない気がするので、その点も、参加していただいたり、実際の体感を教えていただいたりして、ちゃんと良いものにしていただきたいです。

直接は見えていないのですが、東京だと斜めに上がるエレベーターができてきていて、階段を上がる人と車椅子の方も同じ経路で進んでいけるようなので、そうした新しい技術もきちんと取り入れながら、差がないようにというか、区別されている感がないようにするのが本当は望ましいのではないかなと思って聞いていました。

○高野部会長 これも貴重なご意見だと思います。

まさにユニバーサルとバリアフリーというのは書き分けてはいないのかもしれませんが、両方が書いてあって、ユニバーサルという発想ですね。要は、移動の円滑化に関わる法制度に書かれたものを満足すればいいというのではなく、声を聞きながら札幌のまちづくりとしてこれをどう考えていくのかというビジョンをつくって、それを実現することがすごく重要だということですね。

ほかにいかがでしょうか。

○牧野委員 ユニバーサルについては私が特に興味を持っている分野なのですが、その中でも、やはり移動の円滑化です。雪が降る間は、円滑どころか、ほとんどどこにも行けない状態でありましたし、今年は特にひどかったですよね。そこで一番欲しいのは情報なのです。

ハードをバリアフリーにするのはお金もかかりますし、時間もかかります。ただ、先ほど岡本委員もおっしゃっていましたように、エレベーターに乗ろうと思っても、遠回りをして、といたしますか、遠くまで行ってやっと乗れるということがあるのです。情報としてどのぐらいの距離にそういうものがあるのかが分かれば、大変な思いをしなくても、誰かにちょっとサポートをしてもらうなどして解決することもできると思うのです。

また、①-2のバリアフリー情報の充実の中のウェブや冊子という点についてです。札幌市ではバリアフリータウンマップというものをつくられていますよね。しかし、あれを開いてみると、まだ情報が完全ではないというか、幾つかピックアップされて出ている状態なのです。冊子に全部の情報を盛り込むと大変ですし、SDGsということで、今、ペ

ーパースも推奨されていますので、アプリなどを使って簡単にできるようなものがあればいいと思います。

今、ご高齢の方の中でもLINEを使っている人は結構いらっしゃいますよね。下のほうにある大阪メトロのアプリも、最近、実証実験をしていて有効だなと感じているので、札幌にもこれがあるとすごく助かる方がたくさんいるのではないかなと思います。

次に、右の建築物のバリアフリーについてです。

私は、建築士会に入っていて、札幌市のいろいろなバリアフリー改修のお手伝いもさせていただいているのですが、時々、どうしたのだろうと思うようなものも事例としてあるのですね。玄関がバリアフリーではないのに、建物内のトイレをバリアフリーに改修しようとしている業者もいるのです。そもそも建物の中に入れないのにトイレを直してどうするのだろう、ちょっと矛盾しているなと思いますし、きっとまだよく理解していないのかと思うところもあるので、もっと知ってもらいたいという気持ちがあります。

それから、宿泊施設の客室のバリアフリー改修についてです。今、新しくできたホテルでもバリアフリールームをつくっていますけれども、必ずしもバリアフリールームではなくても、車椅子の人でも泊まれることがあるのですよね。例えば、手すりがトイレについていたり、浴室に手すりがあったり、通路幅が確保されているなどです。ですから、どんなお部屋があるかという選択肢をいただければよくて、必ずしも広いバリアフリールームをつくらなくても泊まれるのだということも知ってほしいなと思います。

さらに、心のバリアフリーについてですが、地下鉄などではお手伝いの必要な人は職員に声をかけてくださいという呼び出しボタンがついていますよね。ただ、あれはハードルが高いのです。忙しい職員をいちいち呼び出してお願いするというのは何か気が引けるところがあるのですね。ですから、そういうときに身近にいる人が簡単にお手伝いをしてくれたり、声をかけてくれたり、そういう社会になればいいなと感じますし、これがまさに心のバリアフリーだなと思っていますので、勇気を出して積極的にできるような意識を持ってもらう啓発です。心のバリアフリー研修などもやっていますけれども、そういうことがもっと広がればいいなと思っていますところ。

また、③-2の企業等における取組についてです。

企業等における心のバリアフリー教育ですが、私は令和3年度に企業向けの心のバリアフリー研修をさせていただきました。アンケート結果などを見ると、受けてくださった社員からはすごくいろいろな気づきがあったというお声をたくさんいただいたのですが、やっぱり重要なのはトップだなと思うのですね。私は経営者仲間の経営者の会に入っているのですが、経営者の方の意識がないと、幾ら社員がそういう心を持っていても企業はあまり変わらないような気がするので、まず、経営者の方たちの意識を啓発するような取組をしていただけるといいと思います。

まだまだたくさんありますが、長くなりますので、とりあえずは以上です。

○高野部会長　たくさんのご指摘をいただきました。

移動経路のバリアフリーについて、冬季は本当に大変だというお話もありましたけれども、ここでは再生可能エネルギーの活用を検討するという施策にある意味押し込められている部分もあるのかなと思います。もちろん、そういうことも一つの施策なのでしょうし、冬も含めて、全ての移動を完全に実現することは難しいのでしょうかけれども、私としては、パラリンピックの開催を迎えようとしているという意味では、どういう場面に対するバリアフリーといいますか、どのように冬期でも移動を可能にするかということはずごく重要ではないかなと思っていますところでは。

それから、建築物のバリアフリーについては、基準を満たしていても使えないところがある一方、満たされていなくても利用できる場所もあるというお話がありました。ですから、そんなに大規模改修をしなくてもということなど、いろいろなご意見が出されました。

また、周りの人が勇気を持って手助けできるということですね。子どもたちへの心のバリアフリーというのが学校教育のところに書かれていますけれども、小さいときから、調子の悪い人や病気の人も含めて、困っている人に手助けをする習慣をつけることは総合的なテーマとしてすごく重要だと思います。

ほかにいかがでしょうか。

○山中委員 今の話に乗るのですが、札幌らしい特色のある学校教育というものがやられております。その中で、雪と環境と読書ということになっています。その札幌らしい教育の一つに今議論したような「心のバリアフリー」を挙げたら、今ご指摘されたようなことが進むのではないかと思います。

○高野部会長 そのとおりだと思います。

村木委員がお手をお挙げになっていますので、お願いします。

○村木委員 私は全然出ていないので、唐突なことを申し上げてしまったら申し訳ありません。

今日の資料について、これは分野横断だからだと思いますけれども、今、高野部会長がおっしゃった冬季の乗継機能の強化のところいきなり下水熱が出てくるのはすごく唐突に感じています。別に冬季の乗継機能の強化というよりも、移動経路のバリアフリーという観点ですよね。私は冬に骨折したこともございますが、人に対して歩きやすい状況をつくっていくということですよ。常に再エネを活用することでもいいですけども、下水熱と書いてあるため、この絵では駅の出入り口のところだけで活用するみたいになっていますので、もう少し幅を広げたらいいのではないかなと思いました。

○高野部会長 おっしゃるとおりですね。

椎野委員、何かご意見はございませんか。

○椎野委員 二つほどあります。

今回はビジョン編ということで、ユニバーサルについて、移動経路のバリアフリー、建築物のバリアフリー、心のバリアフリーという三つの観点から漏れなく整理いただい

ますので、お示しいただいている施策の方向性自体には全く異論はありません。ただ、これは言い方が悪いかもしれませんが、割と随分前から施策としてやられていたことがたくさんありますよね。恐らく、今後、戦略編を進めていく上で、その辺の優先順位や重点項目の設定という話になってくるのかもしれませんが、今の時点でそれがどのくらい到達できていて、どこが未達成なのかという整理が必要だと思います。

それに、通り一遍のメニューを並べるのではなく、札幌市としては、最初の3年ぐらいでこういうことをやるとか、半期の5年でここは特に力を入れてやるとか、そうした濃淡をつけた、めりはりのある施策にすれば市民の目にも見えるでしょうし、何となく全体が少しよくなっているなというより、例えば、どこかを突出させ、ここを重点的にやりますという宣言をされたほうがよろしいのかなと率直に思ったところです。

もう一つは、先ほど牧野委員をはじめ、ほかの委員の皆さんからもご指摘があったことですが、札幌はシーズンが二つに分かれますよね。それは、雪のないグリーンシーズンと降雪期の12月末から2月ぐらいのホワイトシーズンです。これは札幌の特徴であり、魅力でもあるのですが、市民の皆さんもご承知のとおり、バリアフリーの観点からはそれが非常に大きな制約になっているわけです。ですから、二つの季節の性質といいますか、寒冷地ならではの2季性みたいなものをまとめてはいかがでしょうか。

冬にはこういう問題が発生するとか、特にこういうところで際立って移動が困難になるとか、こういう建築物の使用が非常に難しくなるなどで、もう既におまとめいただいているのかもしれませんが、こういう一覧表の中でも夏と冬の違いを併記していただけるといいのかなと思います。

全部をやる必要はないかもしれませんが、特にこういうところが冬の場合は重点項目として非常に大事になるなどですね。そうした季節でのめり張りをつけることも必要になってくるかなと思いますし、寒冷地ならではの施策といいますか、市民の生活に寄り添ったビジョンみたいなものをもう一步踏み込んでお示しいただけるといいかなと思います。

具体的なアイデアはないのですが、率直に感じたままをお伝えさせていただきました。
○高野部会長 今の椎野委員のご意見に乗っかりますが、仮に冬季オリンピック・パラリンピックが来るとすれば、今回、ハードの大規模整備はあまりしないわけですが、やはり、冬季のユニバーサルという考え、実際に大雪が降る中でどういうバリアフリーを実現するのかというビジョン、それから、そういったシステムを残すというのが一番のレガシーになると思うので、この中でもそういうところに重点を置いていただきたいと思います。

今、25分がたちました。20分を超してしまうと2時間を超えることになるのですが、ユニバーサルは非常に重要なところなので、もし何か追加的なご意見があればいただきたいと思います。

(「なし」と発言する者あり)

○高野部会長 皆さん、節度を持っていただいて、ありがとうございます。

それでは、資料3については以上といたします。

次に、資料4の説明をお願いいたします。

○事務局（中本企画課長） それでは、資料4の説明に入る前に、椎野委員からご指摘をいただいた指標の設定をどうするのかについてです。これは全体に関わる話だと思いましたが、補足をさせていただければと思います。

本日から次期の戦略編のご議論をいただいておりますが、現行の戦略編と同様に、最終的には、項目ごとに何を指標にするのか、また、10年という計画期間においてどのようなスパンで取り組んでいくのかの強弱をつけることを考えております。

それでは、資料4をご覧ください。

ウェルネスというテーマで整理した項目についてご説明させていただきます。

現状については、言わずもがなではありますが、札幌市は、他の政令市と比較して、人口10万人当たりのがんや糖尿病による死亡率が高く、喫煙率も高い、また、人生100年時代の到来と言われておりますが、健康寿命も短いという課題がございます。それから、高齢者の有業率も政令市の中でも低い一方で、就職希望率は政令市や全国平均を上回っているというアンマッチが生じている状況でございます。

この現状を踏まえた施策の方向性としては、「誰もが生涯を通じて健康で、社会参加ができる社会の実現」を掲げさせていただきました。こちらは、ビジョン編では、ウェルネスとして、「誰もが生涯健康で、学び、自分らしく活躍できる社会の実現」というテーマを設定しておりましたが、そこからこの部分の特出しして、横串で取り組むものという整理をさせていただいたところです。

ここでは、各世代における健康的な行動を促すソフト面の対策と各地域における行動を行う環境を整備するハード面の取組の総合的な対策が必要だということ、また、精神的に充実し、人生100年時代に生き生きと活躍するという視点から、学びや社会参加の場の充実も必要だということを掲げさせていただきました。

その下に施策全体の関連図がありますが、大きく分けて、①の健康行動促進、②はウォークブルシティとして歩きたくなるまちづくり、③の人生100年時代の学びと社会参加という三つの項目に整理をし、この三つがそれぞれ関連しながら、健康、ウェルネスのまちづくりを高め合っていくという整理をしております。

次に、右側をご覧くださいまして、主な施策でございます。

①は、健康行動促進というテーマです。

①-1の子どもへの取組では、運動量の見える化など、子どもの意欲や関心を引き出す取組の強化として、学校や公園等における子どもの運動機会や習慣づくりの推進などを掲げております。

①-2の働く世代への取組では、健康無関心層と言われる方々へのアプローチの強化として、日常の運動量増加や食改善が自然と促される仕組みづくりのほか、オンライン禁煙

プログラム等の禁煙支援の推進を掲げたところです。

①－３の高齢者の方向けの取組では、介護サービスの未利用者も含むフレイル予防の取組の強化として、専門員によるフレイル予防マネジメント推進の拡充の検討などを掲げてございます。

①－４のスポーツ振興のテーマでは、例えば、雪のような札幌ならではの資源を活用した運動の普及を強化いたしまして、歩くスキーなど、気軽に運動を楽しめる機会や環境づくりの推進、スポーツを通して得られた知見を市民の健康づくりなどに還元する仕組みづくりの検討を行うことを掲げました。

次に、②は、ウォーカブルシティ、歩きたくなるまちづくりでございます。

②－１の都心では、居心地がよく歩きたくなるまちなかの実現として、地下歩行ネットワークの充実の検討や、自転車、自動車、路面電車など、総合的な交通施策の推進、都心のみどりづくりの推進などを掲げております。

②－２は、地域交流拠点についてですが、こちらは資料の左下に注釈を入れてございます。拠点ごとの特性を踏まえた空間形成として、仮称ではございますが、歩きたくなるまちづくりガイドラインの策定を掲げたところです。

②－３の住宅市街地の取組では、良好な住環境の維持と連動したウォーカブルシティの形成というテーマの下に、みどりの必要性が高い地域での公園づくり、公園の再整備や機能分担、P a r k－P F I などによる民間と連携した公園の魅力向上策の検討などを掲げております。

次に、③は、人生１００年時代の学びと社会参加についてです。

③－１の学びの場というテーマでは、図書館等の知の拠点としての役割、機能の充実と、仮称ではございますが、札幌博物館の整備検討などを掲げました。

③－２の学び合い・つながりというテーマでは、二つ目の丸になりますが、就労支援施設や図書館などでの職業能力向上や大学と連携したリカレント教育、いわゆる学び直しなどを掲げてございます。

③－３の社会参加では、市民によるまちづくり活動への支援や、高齢者雇用の促進と企業との就業機会の充実に向けたセミナーやマッチング機能の強化を掲げたところです。

ウェルネスの説明については以上でございます。

○高野部会長 これは、健康づくりからウォーカブルシティというまちづくり、そして学びと社会参加と本当に広範になってはいますが、いかがですか。

○牧野委員 質問というか、少し気になったところがあります。現状の中に札幌市は喫煙率が高くともあるのですが、私としてはコロナ禍で喫煙者が減ったような気がしています。これはコロナ前のことなのか、今も変わらず喫煙率が高い状態なのか、教えていただければと思います。

○事務局（浅村政策企画部長） これには直近のコロナの状況を受けてどうなったかは反映させていませんが、全国平均を取りますと、喫煙率は従前から高い部類に入っています。

特に女性の喫煙率が高いというのが札幌市の特徴です。今はデータが手元にないので、分かれば後でお示しします。

○牧野委員 今でなくても構わないのですが、現状のところ依然として喫煙率が高いと入れてしまっているのか、本当のところはどうかを知りたかったということです。

○高野部会長 ほかにいかがでしょうか。

○山中委員 各世代におけるという書き方をしているところで抜けているのは、世代間交流という視点です。これは私ごとになりますけれども、月曜日のNHKのニュースで介護保険外の高齢者の支援をする学生団体を紹介していたのですが、あれは北大の私の学生です。

例えば、若者がお年寄りのお宅の電球を取り換えるというのは介護保険ではできません。そういうときに普通の職員がやろうとすると、どうしても1時間3,000円ぐらいになってしまいます。学生が学ぶ体験のひとつとして、1時間1,000円の有償ボランティアをつくって、学生同士の情報共有はSlackでやったりしています。また、高齢者はアプリを使うのが苦手ですが、スマートフォンの使い方を学生が教えるとか、雪道において重たいものを運んであげるといったこともやっています。

今、30人ぐらいの会員がいます。彼は非常に苦勞して、こうした団体をつくることができました。僕は、札幌の中で、このような学生や若い人が高齢者を支援できるような仕組み、つまり世代間交流も必要だと思っています。是非、ここの箇所にもその視点も入れなくては駄目だと思っています。つまり、おそらく、前のユニバーサルにも関わってくるのでしようけれども、具体的には学生や若い人が支援できるような仕組みづくりをぜひとも入れてほしいと思います。

○高野部会長 キーワードは世代間交流ということですね。

ほかにいかがですか。

○岡本委員 僕は、やっぱりウォークアブルシティのところが気になります。地下歩行ネットワークのところだけ充実検討となっているのですが、ここは充実と書いてくれないのでしょうか。ぜひ充実してほしいと思っています。

西2丁目の地下がもし南北でつながると回遊動線が実現しますので、積極的に地下を利用することは非常に大切だと思いますし、事業化等も見据えた話を含めるのであれば、民間の皆さんにも地下をつくることに参画、投資をしていただきたいとも思っています。そのできた地下通路から、結局、民間のビルにお客さんとして、あるいは、働く人として入ってきやすい、過ごしやすいビルが実現できます。それは、札幌という積雪寒冷地ならではの地下の有効活用として、かつ、都心の回遊性の高まりとして非常に重要なことと思うので、民間の方々にも投資していただき、皆さんと一緒にいく地下というイメージをキーワードとして載せて、事業化につなげてもらいたいと思っています。

○高野部会長 ほかにいかがですか。

○椎野委員 私は、健康行動という非常に重要なテーマを検討するに当たって、健康とい

うのは日々の積み重ねなので、活動の持続性みたいなものが非常に重要だと思っています。要するに、無理なく毎日できる、無理なく継続できるということですが、無理なく健康行動を積み重ねる、それを施策として進めていくに当たっては、日常的にどのぐらいの範囲で生活しているか、要は日常生活圏への配慮が非常に大事だなと感じています。

私は、これまで、高齢者や子どもなどの生活行動や日常生活を調査したことがあるのですが、子どもと高齢者の生活圏はすごく似通っているのですね。人の生活は、成長とともに行動範囲が広まって、小学生ぐらいだと大体、校区内が主なのですが、それが自転車ですぐ遠くに行くようになっていたり、高校生になって遠くに通学するようになっていたり、大学生になってひとり暮らしをするようになっていたり、働く世代になりますと車であちこちに行く、海外に行くなど、生活圏はだんだん広がっていくのですね。しかし、高齢になると、車をやめてしまう、あるいは、お友達が亡くなってしまうということがあって、生活圏が小さくなっていくのです。ですから、結果として子どもと高齢者の生活圏がすごく似てくるのです。

最初は小学校区ぐらいで、最後は生活圏ということで、高齢者の場合だったら歩いて行ける範囲が非常に大事になってくるので、ウォーカブルシティという発想は、まさに健康行動といいますか、健康寿命の延伸には重要になってくると思います。特に高齢者については、子どもと同じように歩いていける範囲で、既存のストックとしては具体的にどういうものがあるか、そこで健康を促すための行動として何ができるかという生活圏に配慮した施策の立て方が非常に効果的だと思っています。

この前、何かの番組で紹介されていたのですが、昨今では、小学校の教員の成り手が非常に少ないので、そのお手伝いをするために地域の高齢の方をコーディネーターとして入れて、野菜をつくるか、クラブ活動のサポートをお願いするというのです。札幌にそういう事例があるのかは承知していませんが、それは非常に面白いなと感じました。

要は、これをやったら健康になるからこれをやりましょうと言っても、人は興味がないとそもそもやらないので、やっぱり、その人の興味に合わせてこういうことができる人を募集しますと言ったほうが、それならやってみようかというふうに活動をしてくれるのではないかと思うのです。例えば、小学校に入って活動することによって結果的に健康になっていくみたいなことで、健康になることが目的というより、その人らしい生活が地域でできることによって健康になっていくという上手な声かけの仕方というか、コーディネートの方ができるといいなと思った次第です。

ですから、生活圏への配慮と自然にその人の健康行動につながるような生活の促し方ができると非常に市民に寄り添った施策になるのかなということですが。

○高野部会長 先ほどの山中委員の世代間交流という概念に近いお話がありました。また、生活圏、いわゆる小学校区といいますか、歩いて暮らせる範囲というのが一番分かりやすい単位だと思うので、そういうものを含めた札幌市としてのウォーカブルシティの考え方を示す必要があるのではないかというお話だったと思います。

ほかにいかがでしょうか。

○岡本委員 椎野委員から、目的があつて、その結果、健康になるということがありました。地域交流拠点のところにもあるように、歩きたくなるまちづくりというキーワードがちりばめられているのですが、これは、地面が歩きやすいからだけで歩きたくなるわけでも、みどりの豊かさだけから歩きたくなるわけでもなくて、目的地があつて、そこに行く経路としてまちを歩いていくということだと思ふのです。ですから、この仮称の部分を見て、目的地と経路とをセットでとらえて歩きたくなるまちづくりガイドラインというのを目指していただきたいと思つたのでお伝えします。

また、先ほど、民間の皆さんにも投資していただいて地下通路を、というお話をしましたが、誤解が生じるといけないなと思ふので、少しだけ補足したいと思います。

地下通路については、幹があつて枝葉が分かれていくというイメージを持っていただきたいと思ふます。道路下の地下が幹で、それぞれの建物に入っていく地下通路、あるいは、出入口が枝葉というイメージを持っておかないといけないということです。民間のそれぞれの敷地で思い思いに枝葉の部分をたくさんつくっても、結局はつながらないリスクさえありますから、皆さんの出資と札幌市、あるいは、そこに興味・関心を持って投資をしたい方々などが協力し、太い幹をきちんとつくってから枝葉を延ばし広げていく段取りを目指すのが望ましいと思つています。

先ほどはそこに触れられなかつたので、発言しました。

○高野部会長 私からも意見を言います。

③-1の学びの場のところに図書館等の知の拠点と書いているのですが、インターネットができ、誰もがアクセスできるようになったため、巨大な知の拠点が家でも容易に手に入るようになりました。逆に、家に帰ると、インターネットで遊んでしまったり、いろんなもの見てしまったりして、肝心の勉強ができないため、賢い中高生なんかは喫茶店などで勉強しているわけですね。そこで、サードプレイスという言い方をされていますが、また、無の拠点といいますか、頭を使ったり、物を考えたり、あるいは、勉強したりできる何も情報のない空間や安いお金で自分の時間を大切にできる公共空間がこれからは求められますし、図書館が知の拠点というのは少し古いのではないかと思ふのです。

それから、学び合い・つながりの中にICTを活用した新たなつながりとありますが、これはいい面ばかりではなく、小学校ではネットいじめみたいなものなど、悪い側面もあるわけです。ですから、そういうことが起きないように人間関係づくりといいますか、インターネットという巨大な情報ツールにまだ人類は慣れていない面があると思ふので、その辺をケアしていくこともウェルネスという点ではすごく重要ではないかなと思つました。

ほかにいかがですか。

○事務局（田中企画係長） 先ほどの喫煙率についてですが、一番最近の令和元年度の調査結果では、札幌市の男女の平均が20.8%、全国が18.3%ということで、約2ポイント強高くなっております。また、女性は、札幌市が14.2%、全国が8.8%ということで、特に女性の喫煙率の高さが目立っております。

委員からのご指摘のコロナの影響については数値としてまだ押さえられていないところですが、特に女性が多いという傾向は過去から続いております。いろいろな政策のほか、たばこ自体が値上がりしたということもあって全国的に下がってきていると捉えているのですが、これまで札幌市のほうが一定程度上回っている傾向があったことから、このような課題認識を書かせていただきました。

○牧野委員 コロナ禍で北海道の喫煙者だけが減っていくのではなく、どこも一斉に減っていった可能性もありますよね。ありがとうございます。

○高野部会長 ほかにございませんか。

(「なし」と発言する者あり)

○高野部会長 それでは、資料5のスマートのその1の説明をお願いいたします。

○事務局(中本企画課長) それでは、資料5のスマートの前半についてご説明させていただきます。

資料の左側はスマートシティの推進、右側は人材育成・産業競争力の強化というテーマで整理をしております。

まず、左側のスマートシティの推進ですが、現状にあるとおり、今、国を挙げてデジタル化の動きが加速しております。その中でも、この資料には掲載していませんが、札幌市においては、1980年代からIT産業の集積が見られ、札幌テクノパークに始まり、こういうITを生かす素地が札幌にはあるだろうということで、これをいかにまちづくりに生かしていくかというテーマを掲げたものでございます。

次に、施策の方向性としては、「誰もが先端技術などの利点を享受でき、生活の快適性やまちの魅力を高めていく」という整理をしております。

その下の主な施策ですが、左側の青色のところは、行政のデジタル改革として、主に行政手続を市民の皆さんにとっていかに使いやすいものにしていくかという視点です。手続をするために区役所に一々行って、何時間も待たされるというところからいいかげんに脱却しなければならないということ、また、全て手続を必要とするのではなく、行政側からお知らせするプッシュ型のサービス提供の仕方でもできるのではないかということで、それらについて検討を行うという内容でございます。

右側の緑色のところは、地域社会のデジタル改革として、企業とも連携してまちづくりにいかにデジタルを生かしていくか、いわゆるスマートシティと言われる分野に取り組んでいきたいということでございます。

その下に併せて取り組むべきこととありますが、デジタルの取組を進めていくに当たっては、アクセシビリティの確保や、デジタル格差、デジタルデバイド対策、セキュリティ、個人情報保護も忘れてはいけない視点であるということで、引き続きしっかりと取り組んでいきたいと考えております。

その下段にイメージ図を入れておりますが、札幌市では、札幌市ICT活用戦略という

計画を個別につくりまして、データの利活用に重点的に取り組んでまいりました。分野をまたいでデータを活用することで、サービスを高度化することができるのではないかとこの挑戦でございます。これは、例えば、今どこで何が起きているのか、あるいは、誰がどこで何をしているのかという情報を適切に活用することができれば、災害時の救援や除排雪の効率化の取組に生かしていくことができるのではないかとこの視点でございます。

また、先んじて開催させていただいた専門部会では、先日のような大雪に見舞われたときに、札幌ならではの生活スタイルということで、授業や診察、お仕事など、オンラインで大抵のものを済ませられるようにして、基本的には家から出ないことにより、外は、緊急車両や除雪車両など、最低限必要な車両だけが走れる状態にすれば除排雪もさらに効率化されるのではないかとこのアイデアもいただいたところでして、まさにそういったことをできるようにするためにも、デジタル基盤、デジタル社会の展開を図ろうというテーマでございます。

資料の右側は、そういった取組を進めていくに当たって、人材の育成や産業競争力を強化することが絶対必要になってまいりますので、その辺を整理させていただいております。

施策の方向性としては、「誰もが新たな価値や可能性の創出に向けて、挑戦できること」を掲げてございます。産業振興の観点からさらなる成長が期待される地域産業を担う高度人材を育成、創出することと、あわせて、そのような高度人材が能力を発揮できるような産業競争力を強化するための取組を推進すること、また、もう一つの視点として、若者が道外へ流出しているという実態がありますので、それを抑制するような産学官連携の取組を推進していく必要があるだろうということを掲げております。

主な施策については、①の教育分野、②の経済分野に大きく分けてございます。

①の教育分野では、高校における数理やデータサイエンスの授業による人材育成や、札幌市立大学におけるA I Tセンターの設置、専門性や実践能力を有する人材を育成するほか、A I 技術を活用した産業振興、地域課題あるいは行政課題の解決に資する共同研究を推進するセンターを立ち上げることを掲げたところです。

②の経済分野では、これまで経済を牽引してまいりました食や観光の復興に加え、新たな成長を目指すということで、下段に囲みにあるように、企業・人の創出、獲得として、I T人材の育成・確保や成長企業の創出、誘致、世界的なバイオ産業都市の形成に向けたバイオ人材・企業の育成や研究開発環境の充実、スタートアップ、支援人材・組織等の集積によるエコシステムの成熟というテーマを掲げております。

右側の投資・モノの呼び込みという視点では、海外からの投資の呼び込みや、新しいテーマとして、D X、ゼロカーボン、S D G s の機運の高まりを捉えた投資も積極的に獲得してまいりたいということを掲げました。

資料5については以上でございます。

○高野部会長 資料5は、スマートのその1ということで、I T教育やI T産業などの施策が提示されておりますが、いかがでしょうか。

○山中委員 またここにはない視点を一つ入れないといけないと思います。ほとんどの子どもたちは、高校までほぼ100%進学しています。この会場にいる私たちも大学を卒業していると思いますが、専門学校生など、大学を卒業していない人もたくさん居ます。札幌の高校を出ていると大学等進学率はかなり高いのですが、道内から札幌にある専門学校に来ている人もいるかと思えます。

例えば、札幌において20歳で見たとき、半分ぐらいは大学生ではないのです。そして、そういう大学に進学しない人たちにデジタルデバイドの問題が発生します。

ですから、ここに書いてあるIT人材をつくるという尖ったところをより尖らすことも大切ですが、札幌としてどういう人材が欲しいかという、ITリテラシーが高い、DXを使いこなせる人材も必要なのです。例えば、「保育士にコンピューターをお願いすると、「えっ、分かんない」という人も多い、そういう人たちのITリテラシーを高める必要があるということです。

このように、ITを使いこなすというのは、ITと何かを掛け算するという格好になるわけです。その何かの人たちがITやDXをちゃんと分かっている必要があります。結局、それが中小企業のDX支援にもつながりますし、札幌市がDXなどに対してのリテラシーを高めていくことを考えていくとき、そのような施策がこの箇所では抜けている気がします。

専門学校や市立高校というのを出しましたけれども、例えば、今、コンピューターを使った教育が始まりましたよね。例えば、道立高校であればBYODですよね。Bring Your Own Deviceということで、与えるのではなく、買わないといけないのです。ただ、これでは買えない人はどうするのかという問題が発生しますので、そういう支援も必要だと思います。あるいは、ここでは非常によくやっている札幌市立旭丘高校の事例と掲載されていますが、どの高校でも、総合的な探究などでちゃんとDXを使いこなせるような教育が必要だと思います。

○高野部会長 そういう意味では、ここに書いているITの技術開発や研究をする人材はつくるけれども、それを効率的にうまく使いこなす人や質の高い利用者をどう増やすかということですね。

○山中委員 いわゆるITリテラシーを高めた人ですね。一見するとDXとは関係なさそうな人こそが使いこなせることが必要なのです。しかし、そういう施策が入っているようには見えづらいということです。

○高野部会長 ほかにいかがですか。

○岡本委員 スマートはすごく大切だなと思いますが、その後いろいろな余裕や余白が生まれてくると僕は思っています。例えば、先ほどあったように、役所の窓口におざわざ行かなくても行政サービスが受けられるというところに注目すると、実際に空間として窓口を減らせたり、もっと便利なところに入手できる端末などがあれば、別に役所が広い空間を用意する必要はなくなります。それが皆さんの暮らしの一場面をもっと豊かにしてい

くような空間の使い方に変えられる面もあると思っています。スマートが大事ではなくて、スマートのその先に出てくる余白も含めて本当は考えないといけないと思って聞いていました。

もう一つは、先ほど山中委員からあった切り口の中で何かとスマートを掛け算するという話があったと思いますが、札幌では、エンタメのところではアートイベントをやったりしていますし、初音ミクもいますよね。デジタルとアートは親和性が高く、取り込みやすいというか、入っていきやすいところもあると思うのです。本日の資料には結構がちがちな話を書かれていますけど、もう少し柔らかいコンテンツ的なことも載せると望ましいと思います。

○高野部会長 eスポーツというのもスポーツの一分野になっているわけですが、エンタメなどが産業として抜けてしまっているかもしれませんね。重要なご指摘だと思いますし、スマートで空いたところの余白をどう利活用するかというのはすごく新しい考え方だと思います。

ほかにいかがでしょうか。

○村木委員 スマートシティのスマートというのは手段なのですが、何かちょっと違う感じの資料になっている気がして仕方ありません。スマートを使って分野横断的に活用していこうと考える際には、各部門がスマート化のメリットを理解しないと絶対的に分野横断にならないと私は思うのです。

国では、今、スマート化のときには必ずロジックモデルをつくれと言われると思います。それは、最終的な目標に対して何を行って、それがどういうふうに関係するのかというモデルをちゃんとつくっていくということです。ここには、例えば、教育や人材育成など、個別具体的なものだけが書かれていますけど、それらが全体の中でどういう位置づけにあるのかをもう少し考えないと、何となく煙突型に分野だけでそれぞれスマートを進めているかのように見えてしまいますよ。

札幌の人々の暮らしをよくするためにスマート技術がどういうふうに関わるのか、それに対して分野横断がどういうふうに関わるのかというのをもう少し書いた資料にしないと、それぞれがただデータを使えばいいということになっていってしまうのではないかなと思って、少し心配します。

○高野部会長 施策のところは、確かに、これまでの資料と比べても、教育と急に業界の産業施策になってしまっていますよね。施策との関連についてどうも読み込みが不足しているというのは私も少し感じているところです。

今の村木委員のご指摘について事務局からの回答はありますか。

○事務局（浅村政策企画部長） 確かにスマートというのは手段であって、その先にある市民生活の利便性、いわゆるスマートシティが目指す生活の質の向上や都市の価値の向上というゴールにどう結びつけるかがまだ弱いというのは我々も認識しているところです。

いわゆるロジックモデルについては国でもご議論をされていて、村木委員もご参加され

ていることは承知しております。やはり、各施策にデータをどう生かしていくのか、データをそろえ、どう掛け合わせることによって、今、目標としている施策を効果的かつ効率的にどう実現していくのかという読み込みについては庁内でも未完成なところがあるなど思っています。

これは戦略編に落とし込んでいく最初の段階で、若干生煮えのような感じの資料になっていますが、ブラッシュアップをしていきたいと思っていますし、委員のご指摘も踏まえ、庁内でもう一度しっかりと見たいと考えております。

○村木委員 政令市だとやることがすごく多く、モデルをつくるのは大変だと思うので、その辺りは少し苦労されるかもしれませんが、ぜひ進めていただきたいと思います。

○高野部会長 ほかにいかがでしょうか。

○椎野委員 村木委員からご指摘をいただいたところと関連して、資料の中で、本学のAIを活用した技術革新や専門人材の育成をご紹介いただいておりますが、本学の学長はAIが専門で、実際には研究としてフィールドに入っているのですね。具体的には、厚別区のもみじ台団地という高齢化率49%のところに入って、AIを活用したMa a Sなど、サービスとしての移動をいかに効率的に実現するかだとか、看護学部先生も共同研究として入って、看護の視点から特に高齢者の生活支援サービスをこれからどういうふうに包括的に充実させていくかというかなりプラクティカルな研究活動を推進しております。

この資料では、言葉だけを見ると、何をしようとしているのかが読み取れないので、こういう視点で研究をやった結果、今、地域が抱えている課題にはこういうものがあって、高齢者の生活を包括的に支援しようとしていますよという研究の目指しているところやそれをどう活用するのかをもう少し具体的に書いていただくと、そういうことなのだねというところが分かるのかなと思いますので、その辺は少し加筆いただいてもよいかなと思いました。

また、主な施策の①は教育分野となっていますが、中身としては研究も入っていますよね。教育と研究というのは質の違うものですから、もし変更できるのであれば、教育研究分野という書き方のほうが適切かなと思いましたので、ご検討をいただければと思います。

○高野部会長 おっしゃるとおりで、研究と教育が分かれておらず、総称して教育と書かれてしまっていますね。教育機関ということで両方を含めているのかもしれませんが、よろしくをお願いします。

ほかにいかがですか。

(「なし」と発言する者あり)

○高野部会長 次に進めてまいります。

資料6のスマートのその2についてご説明をお願いいたします。

○事務局(中本企画課長) では、資料6のスマートの後半についてご説明いたします。左側はゼロカーボンの推進でございます。

まず、現状についてですが、札幌市は、2050年までに温室効果ガス排出量を実質ゼロにするという目標を掲げており、都市のリニューアル時期を見据え、官民が連携の上でまちづくりの環境政策を一体的に進めていく必要があることを再整理しております。

施策の方向性としては、「脱炭素社会の早期実現に向け、更なる省エネルギー化、再生可能エネルギーの導入拡大などを推進」としました。

主な施策は、四つに大きく分けてございます。

①の省エネでは、住宅やビルの高断熱・高気密化の促進、支援、省エネ行動の促進に向け、温室効果ガス排出量の見える化など、効果的な普及啓発の検討、灯油から電気やガスなどの温室効果ガス排出量の少ない暖房・給湯機器への転換促進に向けた検討を掲げております。

それから、②は、再エネとありますが、再生可能エネルギーの省略でございます。この項目では、二つ目の丸として道内各地域で発電された再生可能エネルギー電力の市内利用に向けた検討、四つ目の丸として水素利活用の推進を掲げたところです。

③の移動というテーマでは、ゼロエミッション自動車の導入促進や水素モデル街区の整備を掲げました。

④の資源という項目では、ごみ焼却量の削減の推進などを掲げております。

続いて、資料の右側は「ゆきとの暮らし」、ゆきの利活用というテーマです。

現状についてですが、言わずもがな、今年の冬の大雪には皆さんも大変ご苦勞をされたかと思います。

施策の方向性をご覧ください。

①のゆきとの暮らしでは、高齢化のさらなる進行、生産年齢人口の減少に伴い、除排雪の就業者の減少が課題になっており、こういった環境の中においても、将来にわたって持続可能な除排雪体制の確保に向けて、作業の効率化、就業者の確保、育成の取組を推進する必要があることを整理しております。

②のゆきの利活用では、ウインタースポーツや観光産業の振興を図る必要があることや、豊富に存在する雪を利活用する雪氷熱、雪冷熱エネルギーについて、技術動向を注視しながら今後の可能性について検討していく必要があることを掲げております。

これを踏まえた主な施策は下段にございます。

①は、ゆきとの暮らしとして、除排雪作業の省力化、効率化に引き続き取り組んでいくほか、建設産業の活性化の取組による担い手の確保も引き続き行っていくとともに、大雪時における対応の検討を掲げたところです。

②は、ゆきの利活用ですが、②-1の都市型スノーリゾートシティとしてのブランド化というテーマでは、スキー場の魅力向上、冬季観光コンテンツの充実、ブランド力向上や周遊促進に向けた事業者連携の推進を掲げております。

②-2のウインタースポーツの振興では、ウインタースポーツを楽しめる機会・環境づくり、スポーツボランティアの活性化を掲げました。

その下段の雪氷熱・雪冷熱エネルギーの導入というテーマですが、雪貯蔵施設の建設費などの初期費用、あるいは、維持費に比べて、光熱費の削減効果は非常に低く、費用対効果に大きな課題を抱えている現状にあるものの、既存の施設の活用を継続していきながら、最新技術の動向を注視し、今後の可能性について引き続き検討を進めていくことを掲げてございます。

スマートの後半の説明は以上でございます。

○高野部会長 その2としては、ゼロカーボンの推進、ゆきとの暮らし、ゆきの利活用ということで、それぞれ施策が掲げられておりますが、いかがでしょうか。

○山中委員 まず、ゼロカーボンの推進についてですが、市民の意識や行動変容に関する施策に無いように見えます。最近、気候変動教育という新しい言葉が生まれつつありますが、2050年に温室効果ガス排出量を実質ゼロにするためには人々の意識がきちんと変わらないとできません。札幌市では、ワークショップをやったり、気候市民会議を開いたり、かなり先端的なことをいろいろとやっていると思います。是非とも市民の意識を変えていくぐらいの気持ちで、それらをもっとやっていただきたいと思います。ただ、こういう施策をつくる際には、もちろんトップダウンでやるのはよろしくないの、市民の声をちゃんと入れていく必要があります。

これは、次の人口減少対策にも関係すると思いますが、自分たちでまちをつくるという意識の中で、気候変動に関しても、まちをどういう形にしたらよいかということ話し合っていて考えていく必要があります。実は、ゼロカーボンは横断的の中でもさらに横断的なものなので、バリアフリーでも、IT化やDX化でも、何でもゼロカーボンは入れていかないとはいけません。つまり、市民の意見を聞くような仕組みをぜひとも入れてほしいなと思います。

もう一つ、施策の方向性に「道内各地域との連携の下に」とこの箇所には入っていますが、施策ではどういう連携を取るかがあまり見えていません。私は、ゼロカーボン北海道推進協議会の座長をやっていますが、例えば、見える化として、一人一人がどれだけCO₂を出すかについて、道でアプリをつくったりしています。そういうものを道とダブルでつくる必要はありません。道あるいは周辺市町村とのCO₂をどう減らすかについて協議していくこともここに書き込んだ方がいいと思います。

○高野部会長 ほかにいかがですか。

○牧野委員 私も山中委員と同じ思いです。やはり意識が変わらないと環境は変わっていかないと思うのですよ。そのためにも、ゼロカーボンのことを知ってもらうこと、あるいは、SDGsのこともそうですが、ハードル高く考えるのではなく、自分の身の周りの身近なことから気づいてもらうといいですか、江戸時代の暮らしのように、物を大切にすることにもつながっていくと思いますので、これはぜひ子どもの教育の中に入れていただきたいと思います。

次に、ゆきとの暮らしについてです。やはり除雪の問題は難しいことがたくさんあると

思いますし、行政や事業者だけではどうしても足りないところがいっぱいあると思うので、地域において除雪で困っている人たちをみんなで助け合うとか、余っている人のパワーで何かできないものかと思っています。例えば、消防団がありますよね。その代わりといえますか、除雪団みたいなものなど、完全なボランティアではなくて、除雪の仕組みとして、みんなが助け合って安心して暮らせる仕組みを確立していけたらいいと感じています。

また、最後のところにあるエネルギーの導入では、費用対効果に大きな課題があるということですが、これは本当に難しいと思っています。排雪で集められた雪の山を見ていると思うのですが、あれをうまく活用できたらいいですよ。あれは宝物で、解けるのを待つだけでは、と思います。ただ、あれを運ぶことで二酸化炭素が排出されたり、別の問題もあつたりすると思いますが、諦めず、いつかエネルギーに換えていけるように進めていただければと思います。

○高野部会長 ほかにございませんか。

○岡本委員 立地適正化計画等では今後の人口の薄まり方も考慮して計画を立てていたと思います。今後、人口が減っていき、人口密度が薄くなっていくと、除雪の効率化が余計に難しくなっていくという事実がきっと出てくると思うのです。、そこでどういうふうに対処・工夫できるのかは、すごく考えないと実際には難しそうだと思います。

また、施策の方向性のゆきとの暮らしのところでは、予算に対する従業者数が書かれているので、人が減って除雪が大変になり、それぞれの事業者が苦勞されている中、単価を上げて頑張っていたというふうに読むのが正しいのかもしれないのですが、もう一方で、積雪深と予算ではなく、積雪深と決算で見るとどうなるのだろうかというのは気になっています。どのくらい降ったときに幾らかかったのか、どのくらいの方々に活躍していただいて実際の除雪がかなったのかが見られると、また別の読み取り方ができるのではと思っています。

最後に、除雪で動かす重機は二酸化炭素をすごく出しているとも思うのです。先ほどのデータ系のスマートのお話しでも、通信や電力でさえ結構な量のカーボン排出に置き換えなければ計算できないと聞いたことがあるので、トータルでバランスよく見ていくことが必要なのではないかなと思って聞いていました。

○高野部会長 何点かご指摘をいただきました。

ほかにございませんか。

○村木委員 再エネと移動のところに水素と出てくるのですけれども、水素は2050年までの間にどういうふうに札幌市の中で整備を進めていくのでしょうか。

最後のところで費用対効果の話が出ましたが、雪冷熱エネルギーの導入には費用がすごくかかりますし、実は水素も物すごい費用がかかって、選手村でも20年計画がありますけれども、事業者は10年でもう辞めたいぐらいの赤字になってしまうのですよね。いろいろところで水素と書かれているのですが、全然うまくいかないことを書いてしまってもしょうがないと思うので、どういうタイムスパンでやるのか、コストのことをどう考

えるのか、水素は何でつくってどこから持ってくるのかを考えないといけないと思います。本当に水素がつくれるような場所であれば、需要と供給のことも考えられますが、札幌の場合は何でつくるのかなというのがまず一個あるかなという感じがします。

また、私は、都心エネルギーマスタープラン等をやらせていただいているので、結構いろいろなことを考えてきていることは分かっているのですが、郊外の戸建て住宅の暖房の灯油利用をどういうふうに変えていくのかです。ストックへの対応を考えると、戸建て住宅地の排出量のことも脱炭素という観点では結構大事な論点かなという感じがします。

それから、再エネのところでは、再エネをつくり、それを活用すると書かれていますが、今のところ、再エネをたくさんつくってもグリッドに戻すには限界があって、インフラの増強はそんなに簡単ではないのですよね。そうすると、どうやって蓄電をしていくのか、つくった電力をどうやってためていくのか、それから、需要側が電力をそこまで使わなくてもいいような建物にしていくことも併せて書いていかないと脱炭素は結構厳しいだろうなど思っています。

○高野部会長 非常に重要な基幹的なお話だったと思いますが、山中委員から今のお話について何か追加でご発言はありますか。

○山中委員 再エネや水素に関しては札幌には生産地がほとんどないので、周辺分野との協力でやっていかなければならないということですね。あと、ビルの高断熱、省エネという視点のゼロエミッションビルディング（ZEB）やハウス（ZEH）がありますよね。札幌市は既に取り組んでいると思いますので、もっと積極的に進めるのだというところは、より打ち出してもよいと思います。

○高野部会長 私からゆきとの暮らしのところについて1点です。

ここでは除雪をすれば雪の問題が解決されるという感じになっているのですが、つるつる路面の転倒によりけがをされている方が大変多いのですよね。これはずっと研究等をやっけていまして、その統計を見ますと、救急車の搬送は1,000件を超えており、実際にけがをされている方はその数十倍ということで、骨折をしても救急車を呼ばない方のほうが多いぐらいなのですよね。そういう意味では、市民の1%ぐらいはけがをされているということなのです。

また、札幌外から来られて骨折をされた方の話も結構聞くのですが、もう二度とこんなところになんか来ないわと思うわけです。先日も新千歳空港に2晩泊まれた人もいるわけです。ですから、除排雪も重要ですけども、大雪時における対応ということで、つるつる路面での転倒でけがをされる方は多数に及びますし、除雪や屋根の雪降ろしで亡くなる方も後を絶ちません。これへの根本的な施策というのはなかなかないのですけれども、そういう記述も少し入れていただいて、ゆきとの暮らしについて、そういう面の解消も考えていただきたいというのが私のお願いでございます。

ほかにはいかがでしょうか。

（「なし」と発言する者あり）

○高野部会長 ここまで結構順調に来ていて、あと一つを残してまだ23分あります。

それでは、次の資料7に行きたいと思います。説明をお願いいたします。

○事務局（中本企画課長） それでは、資料7の人口減少対策をテーマに整理したものについてご説明させていただきます。

まず、現状についてです。こちらもご承知のところと思いますが、札幌市も、本年1月時点で、政令指定都市への移行後、初めて人口が前年比で減少しました。これはコロナ禍の影響での数値となりますので、一時的な変動かどうかは判断が難しいところですが、いずれにせよ長期的に人口が減少していくことには変わりがない状況でございます。

また、現在、合計特殊出生率が1.09と政令指定都市の中で低位に位置しております。道外との関係で見ると、20代の若者が大きく転出超過している現状にあります。

こうした人口減少の緩和に向けて、第2期さっぽろ未来創生プランを立てまして、質の高い雇用創出と魅力的な都市づくり、結婚・出産・子育てを支える環境づくりという二つの基本目標を掲げ、様々な取組を進めてきたところでありますが、残念ながら状況は改善していないのが正直なところです。

次に、施策の方向性ですが、①は、今申し上げた第2期さっぽろ未来創生プランに掲げた取組を強化すること、②は、新しい視点として若い世代へ向けたアプローチの強化を掲げております。特に、若者との親和性が高い大学との連携を強化することで若者の呼び込みと定着を図り、また、大学の知見をまちづくりに生かすことが重要なのではないかと考えてございます。

施策の全体像については省略させていただきます。

次に、右側の主な施策でございます。

まず、基本目標1というのは、未来創生プランで掲げている基本目標1ということですが、質の高い雇用創出と魅力的な都市づくりというテーマです。

①の2期プランの取組強化では、スタートアップの創出に向けた専門人材の登用、イノベーション創出拠点の整備や中小企業の新分野への展開、業態・業種転換への支援、テレワーク導入補助の拡充など、企業への支援を引き続き行っていくことを掲げております。

②は、新たな視点での2期プランの推進、若い世代へ向けたアプローチの強化というテーマですが、基幹総合大学である北海道大学と戦略的なまちづくりを行うことに加え、札幌圏の大学間の連携強化、地域に根差した取組に対して支援を行うことを掲げました。大学や大学生と行政や産業、地域がより接点を持つことで、進学においても起業を含めた就職においても魅力的な札幌市にしていくことを目指すものでございます。

次に、基本目標2は、結婚・出産・子育てを支える環境づくりというテーマです。

①の2期プランの取組強化では、子ども食堂等の子どもの居場所づくりやひろば型常設子育てサロンの機能強化、若者の出会いの場づくりにおいて、オンラインやAI等の活用といったより効果的な手法の検討を行うことを掲げております。

②の新たな視点である若い世代へ向けたアプローチの強化では、妊娠後のケアはもとより、妊娠前から体や性への正しい理解を深めるプレコンセプションケアと呼ばれる取組を進めていく考えであり、一人一人の人生設計における様々な選択を可能とし、地元への定着や、結婚、出産、育児に希望が持て、子どもを産み育てたいと思える環境を実現していくことを目指すものでございます。

資料7の説明は以上でございます。

○高野部会長　ここは人口減少対策ということで、基本目標1は社会減対策、基本目標2は自然減対策で、その両方が書き込まれておりますが、いかがでしょうか。

○山中委員　ここで挙げられている人口流出についてです。確かに20代の前半で流出しているの、大学を挙げたのかもしれない。ただ、ここで北海道大学と出ていることについてです。私は北海道大学の教員ですから北海道大学を取り上げることは個人的にはうれしいのですが、特定の大学名を出すのには少し違和感を持つところです。

実は、私は、最近、道内の高校生とオンラインで話し合う交流会をやっています。北海道の地方の市町村の高校生は自分の地元愛、地元の魅力を語れます。しかし、札幌の高校生は札幌の魅力を語れないのです。札幌愛がかなり落ちているということです。

一方、札幌市立高校は、連合でプレゼンテーション大会を行っていたり、非常に素晴らしい活動をしています。市立高校の総合的な探究の時間の取組が素晴らしいわけですよ。強いていえば、札幌は大都市ゆえに、自分たちでまちをつくれるといった視点がこの箇所では抜けています。

少し皮肉っぽく言えば、書くことがないからごく一部の施策を挙げているように感じられます。高校生を洗脳しろということではありませんが、自分たちで地元のまちをつくれる、自分たちが地元のことをよく理解できている、ような小中高の取組がこの箇所に書かれるべきという感じがします。

SDGsに関わる教育もそうだと思いますが、幼稚園から始まり、高校までその教育をずっとやり続けて、札幌圏の大学がそれに加わって、札幌を中心としたSDGsなり、札幌の地元とは何でしょうといった魅力を理解するような一貫した教育のプランを考えたい方がいいのではないかと思います。

○高野部会長　高校では地理の教育が必修化されるということで、都市計画学会なんかもばたばたしているところがあるのですが、そういうことも含めたご指摘だったと思います。

ほかはいかがでしょう。

○岡本委員　道外転出超過のところに20歳から29歳と書いているのですが、例えば、この中身がもう少し分かったら意味が見いだせるのかなと思いますし、大学進学で道外に出ているのか、就職で出ているのかということも結構気になるなと思っています。こちらは、大学を卒業してそのまま地元に残ってほしいと読み取れるような書き方になっているのですよね。ただ、北海道大学だと半分以上が道外生ですが、札幌圏の私大などは、札幌あるいは道内から来ている学生がほとんどなので、長い目で見たときには、一度、道外で

社会経験というか、働いてみたり、友達のネットワークを増やしてみたり、いろんな出会いがあったりして、やっぱり北海道はいいな、北海道で仕事がしたいなと戻ってきたときにちゃんと働ける場所があるとか、先ほどもあったスマート系のITの企業など、先端的な働く場につながっていくとするほうが望ましいように思います。そうすると、札幌だけではなく、北海道全体のよりよいまちにつながっていくのではと思う節もありますし、地元に着のみ注視するのではなく、Uターンなどの際、一緒についてきてくれるIターン組もいると思うので、そういう側面も盛り込んで書いたほうがいいと思います。

また、仕事だけではなく、趣味優先でライフスタイルを選び、ウィンタースポーツが好きだから北海道に住んで、オンラインでできる仕事をするのだという人などもこれからは出てくると思うし、もう既にいらっしゃるとも聞いています。先ほどは仕事があるという言い方をしましたけれども、仕事だけではなく、ライフスタイルを優先して、雪のある環境や暑過ぎない環境など、北海道の気候が好きだという人たちも受け入れられるようなまちの実現を目指していく書きぶりがあると人口減少対策になるのではないかなと思います。

○高野部会長 最初のところで触れておられた20歳から29歳は大幅な道外転出超過と書いているところは、例えば、男女別や年齢、大学進学時なのか、その後なのかという細かいところは何か分かりますか。

○事務局（田中企画係長） 道外との転出、転入の差引きについて、多い理由としては就職ですね。やはり、男女とも、就職で道外に行く方が道外から来る方に比べて多く、合計すると1,000人以上という単位で多いということがございます。

○高野部会長 そのことに関して日頃から思っていることがあります。

札幌というのは、男女比で言うと、女性が非常に多いのですね。これは若い世代もそうでありまして、要は、極端な物の言い方をすると、男子は、就職時に札幌に残らずに割と道外に行ってしまう一方、女子は、道外に行く人も多いのですけれども、実は、道内の札幌以外のまちから札幌にやってこられてしまうということなのです。ですから、社会増を頑張ろうとすると、先ほどからいろいろと出ていたように、ほかの自治体からは、いいかげんにしろよ、これだけ札幌に人を送り込まざるを得ない状況なのにまだそんなことを言っているのかということになりまして、そのような他都市との関係を道都の札幌市としてはどう考えていくのでしょうか。

いわゆるダムのせき止め効果で道外への流出を防ぐということなのかもしれませんが、いたずらに社会増、社会増と言って、道内の他都市からいっぱい受け入れてしまっていることも無視するわけにはいかないのではないかなという感じもするのですが、この思想について事務局はいかがですか。

○事務局（浅村政策企画部長） 人口減少問題、それから、いわゆる札幌一極集中については我々も非常に課題視をしています。人口が増えることのメリット、デメリットの両方がありまして、大都市であるがゆえに、ほかの都市とは違う機能が求められますし、それを整備していくということがあります。その一方で、やはり、北海道の地域構造として、

札幌だけで経済が成り立っているわけではなく、北海道のほかの地域で様々な生産活動や経済活動が行われていることで札幌の経済は支えられていますし、札幌の経済も結局は他地域の経済との関連性で成り立っているところがあるのですが、高野部会長がおっしゃったように、人口流入によってそのバランスが崩れているというのは課題として考えています。

また、高等教育機関の集積ということがあって、北海道内の若者、特に大学に入る人たちは、ほとんどと言うと語弊がありますけれども、かなりの方が札幌圏に出てきてしまっているのです。その人たちが道外に出ていけないようなダム機能を果たさなければいけない一方、我々としては、北海道内のバランスの取れた維持、発展も意識しなければいけないかなと思っています。ただ、いわゆる人口移動については、行政施策だけではなかなかコントロールできないところがあるので、そこは難しい問題なのですけれども、北海道庁や他都市とも十分議論をしながら進めていくというスタンスで臨んでおります。

○高野部会長 山中委員、お願いします。

○山中委員 補足をさせてください。

札幌市は確かに女性が多いのですが、実は、女性のほうが北海道の地域から流出するのですよね。それは大学ではなく、専門学校や就職などの方が多いのです。ですから、こういう議論をするときに、「20代＝大学生」と考えると、一部分しか見ていないことになるので、ぜひとも専門学校や就職した人たちなどのことも考えていただきたいと思います。

○高野部会長 人口減少対策について、ほかにいかがでしょうか。

○椎野委員 個人的な意見というか、感想になってしまうと思います。

私は、2人目の子どもが産まれたときに、札幌市から有料の燃えるごみの袋を10袋分ぐらいもらったのですよね。これはほかの市町村が考えられたのかもしれないのだけれども、よく考えたなと思っていました。赤ちゃんはおむつを頻繁に替えないといけないので、おむつ代はかかるし、おむつを捨てる有料の袋代もかかるのですが、子どもが産まれたからそこをサポートしましょうというのは本当によく考えたなと今でも思っているのです。

何を申し上げたいかという、ここで掲げている二つの未来創生プランのうちの一つの結婚・出産・子育てを支える環境づくりは、職員の方の中でも、特に、今まさに子育てをリアルタイムでされている若い方を中心に考えていただきたい、そうすべきだということです。子育て環境の施策というのは、昔、自分が体験したときより新しいメニューやプログラムがどんどん出てきているので、ベテランの方というより、今、子育てをしている若い方を中心にタスクフォースをつくるという形でぜひ進めていただきたいなという希望を持っています。

○高野部会長 政策については、子育て対象世代の人がメインで立案をすべきだという話ですね。

ほかにいかがでしょうか。

○村木委員 私は、このところにはあまりないのですが、一つだけ言うとなると、アフ

ターコロナによって暮らしの拠点をどこに置いてもいいというふうに変ってきているので、社会増をもう少し大きく捉えるのであれば、日本全国から人を持ってくるとか、札幌の魅力でいろんなところから人を呼び込んでもいいのかもしれないなと思いました。

○高野部会長 山中委員、お願いします。

○山中委員 今の村木委員の発言を聞いて思い出したのですが、世界の中で魅力ある都市になるというのが掲げられていますよね。岡本委員もIターンやUターンと言っておりましたように、人口対策という意味では、今の若者を残すだけではなく、社会人をたくさん連れてくるような魅力のあるまちをつくろうという文脈で、自分の意見になってしましますけれども、自分たちがまちをつくることができるのだ、住民参加のまちなのだとこのころを売り出したほうが人口減少対策にもなると思います。

○高野部会長 村木委員のお話に触発されたのですが、要は、人口減少の人口というのは、本当に住んでいる人だけの話でありまして、きっと交流人口や関係人口も一つの大きな指標になるはずなので、そういう視点を入れることも重要ななと思いました。

ほかにはいかがでしょうか。

(「なし」と発言する者あり)

○高野部会長 これで本日の議事については終了ですが、全体を通して何かご発言があれば頂戴したいと思います。いかがでしょうか。

(「なし」と発言する者あり)

○高野部会長 皆様方の協力により、1分前に事務局にお返しすることができます。

それでは、事務局にお返しいたします。

3. 閉 会

○事務局（浅村政策企画部長） 本日は、長時間にわたり、活発なご議論をいただきまして、また、議事進行にご協力をいただきまして、ありがとうございました。

様々な意見をいただきまして、今の段階で一つ一つにお返しすることは難しいのですが、ユニバーサル分野では、バリアフリーを守ることだけではなく、共生社会が強みになって価値を生み出していくためには包摂という観点も必要だと思いますし、それは、世代間交流だったり、多様性を認め合ったりすることも含めて考えていかなければいけないのかなと思っています。その前提として、まだまだバリアフリーが足りていないところを押し上げていかなければいけないということで今日はご議論をいただいたところです。次回は、分野別の基本目標に沿った戦略についてご議論をいただきますが、その中で今日いただいた意見も踏まえたものをお示ししますので、それをトータルすることで少し立体的に戦略的に見ていただけるかなと思います。

また、ウェルネスについてもそうでしたが、やはり冬期間にフォーカスをしたトータル

施策も打ち出していく必要があるのかなと感じました。

それから、世代間交流については基本目標の中でも出てくると思います。人生100年時代において、支える人と支えられる人というのが一方的な関係ではなく、多様性により一人一人が活躍できる社会もつくっていけるとと思いますが、この点も含め、次回にお示すべく、整理、反映させていただきたいと思います。

また、DXについては、どういうふうの実装され、市民生活の中で皆さんがどう実感できるのかがなかなか見えてこないというご指摘があったかと思います。我々も幾つかの分野で仮設的にどういうモデルができるのかの検討を加速させ、具体的な戦略の出来上がりのところでお示しができればなと考えております。

それから、脱炭素については、再生可能エネルギーや水素について、需要と供給のトータルストーリーづくりがなかなか見えてきていなかったのかなと思います。また、供給側が札幌市内にはなかなかないという中で、主に道内になりますけれども、周辺市町村との連携を具体的に戦略的に描いていくことが必要かなと考えております。

最後に、雪に関してですが、これから持続可能な除排雪をCO₂の観点も含めてどのように考えていくかということは、今年の冬の大雪も踏まえながら、今までの前提をかなり変えていくような検討も進めていきたいと考えてございます。

それでは、次回の会議についてご説明をいたします。

○事務局（中本企画課長） 次回の第3回目の専門部会は6月に開催をしたいと考えてございます。日程調整につきましては運営を受託していただいているノーザンクロス様から改めてご連絡をさせていただきます。具体的な議題についても改めてお知らせいたしますので、どうぞよろしくお願いいたします。

以上でございます。

○高野部会長 今の進め方について私から1点です。

資料2-1によると、我々は、次回、環境、都市空間について議論をするという立てつけだと思うのですが、そうは言いながら、今日の議論を聞いていてもお分かりのとおり、ほかのところにも結構関係するとか、非常に興味がある分野もたくさんありそうなので、ほかの分野のことについても検討できるように少し考えていただければと思います。もちろん濃淡があつていいと思いますけれども、よろしくお願いいたします。

それでは、以上で終了とさせていただきます。

夜分にどうもありがとうございました。

以 上